

狛江の人々の日常生活の歴史を紹介する『広報こまえ』の連載「今はむかし」は、平成5年12月から約27年間、300回以上にわたって掲載され、狛江市制施行50周年記念事業のひとつとして上下2冊にまとめられた。連載当初から執筆を続けている郷土史研究家井上孝さん(88)に話を聞いた。

出版について■大変ありがたいですね。平成20年に『広報こまえ』の1000号記念として一度刊行されたことがあり、続編もいつか出るとは思っていました。広報だと見逃す人もいるので、本にまとまっていれば残ります。後世の人にとっても、昭和の狛江の姿や庶民の生活、さらには戦争中の狛江の人がどんな生活をし、戦後にどんな活動をしたかが分かり、歴史を考えるのに役立つと思います。連載を支えてくれた市民が大勢いたから本にまとめられたわけで、感謝しています。

郷土史研究の原点■僕の郷土史の原点は電車と自動車です。僕は千代田区麹町生まれで、小学生の頃は中央区銀座にいました。家の前に市電(後の都電)が走っており、小学生時代は乗るだけでなく切符も集めていました。通っていた泰明小学校の音楽室の窓から東海道本線を走る汽車を見ながら、どこまで行くんだろうと想像し、鉄道を通して都市の地理・歴史について興味を抱くようになりました。

もうひとつが戦争体験です。僕は小学6年生から中学1年生まで空襲にさらされました。昭和20年1月には泰明小学校に爆弾が落ち、4人の教師が殉職、2人が重傷を負いました。僕は防空壕に逃げ込んで助かりましたが、自宅は壊れてしまい、引っ越しました。ところが、その家も焼夷弾で焼けてしまいました。20年の8月15日には戦争に負けたわけですが、勝った負けたではなく、戦争というものの悲劇を、これまで書いてきました。平成8年に刊行された『狛江・語りつぐ戦争体験』では、僕の戦争についての体験や知識の上に立って編集しました。

昭和の狛江の暮らし■昭和の狛江の生

昭和の狛江の生活をなるべく広く、あらゆる分野から書き残したい。

活をなるべく広く、あらゆる分野から書き残したいです。そうすると毎月1回ずつ広報に書いてもきりがないので、同じことは書かないようにしています。また、ひとつの問題でも、例えば多摩川なら、川の流



郷土史研究家 井上孝さん

れ、洪水、子どもの遊び、釣りとか、テーマを分けて、なるべく広い範囲からたくさんの題材を書き残して狛江の今の姿を残していきたいと考えています。

記事の元になる資料は村時代からの広報や議会報、時には議会議事録に当たるとあります。そのほか、図書館や行政資料室の保管文書を見せてもらったり、狛江市外の図書館などにも行きます。もちろん、自分でも以前から資料を集めたり、聞き取り調査をしています。最近はやや難しくなりましたが、とにかく膨大な資料の中から取り上げるテーマを選ぶのが大変で、苦労します。

また、記事に間違いがないように、いつも気をつけています。同じテーマの話でも人によって違うことがしばしばあります。そのために、できるだけたくさんの人に話を聴いて、確認するようにしたり、多くの文献や資料に当たって事実を確かめ、客観性を保つようにしています。

広報の連載も300回以上になりましたが、これまで辞めようと思ったことはありません。ただ、最近は大いばきつくなりました。でも、皆さんのお役に立つなら、僕ができるうちは続けていきたいと思っています。

郷土史研究の役割■狛江の街を歩くと

いろいろなものに出会います。そして「これはなんだろう?」という疑問を持ちますが、その疑問に答えるのが郷土史の大事な役目です。博物館へ行ったり、歴史の本を読んだり、テレビで歴史ドラマを見ますが、出てくるのは、例えば信長、秀吉、家康といった政治・経済や文化などの代表的な人や物ばかりです。しかし、人間の数では圧倒的に多い庶民の暮らしについては、情報がすごく少ないのです。そうした中で、郷土史を通して、それぞれの時代の庶民がどのように暮らしたかを知ることが大事です。それが、郷土史に託された大事な役割だと思います。歴史は繰り返すということがありますが、そうした時に歴史を学ぶことはすごく大切です。それぞれの時代に庶民がどのように活動したかを知ることが、先人の知恵を生かすことができます。これからも郷土史を楽しみながら勉強していきたいなと思います。

井上孝さんの横顔■千代田区麹町に

生まれ銀座で育つ。昭和28年に東京学芸大学国語科卒業、同年武蔵野市立第二小学校教諭となる。34年に國學院大學文学部史学科の夜間部に通い、中学校社会科の免許を取得、35年に日野市立第一中学校の教諭となる。42年に狛江町(当時)へ転居。44年に狛江第二中学校、48年に狛江第三中学校へ異動、61年に狛江第二中学校教頭、平成2年に狛江第一中学校校長を勤め、5年に退職。45年に狛江文化会入会、狛江の郷土史への関心を深め、学校の副読本や記念誌づくりを手がける。53年頃から狛江市文化財専門委員、市史編さん委員を務める。平成2年の『狛江・語りつぐむかし』、8年の『狛江・語りつぐ戦争体験』の編集に関わった。5年から『広報こまえ』に中島恵子さん(故人)と交代で「今はむかし」を連載。23年3月からひとりで執筆を担当、200回以上を数える。妻と娘の3人家族。

老舗めぐり

◆96◆ 最終回

国産の安全な蜂蜜を直接仕入れて提供

五十川養蜂園(駒井町2-5-2)は、国産蜂蜜の製造販売を60年以上にわたって続けている専門店。

創業者の五十川悟朗さん(昭和10年~平成13年)は岐阜県揖斐郡池田町の庄屋に生まれた。近くの揖斐川周辺ではかつて養蜂が盛んで悟朗さんの兄2人も、開花に合わせて九州から北海道まで移動する転地養蜂業を営んでいた。悟朗さんは高校を卒業すると兄の養蜂を手伝いながら、花の少ない秋から冬は東京の食品問屋や和菓子屋などを回って蜂蜜の販路を開拓した。昭和33年に拠点を実家から東京へ移して独立、「五十川養蜂園」の名で卸売りにも力を入れ始めた。36年に高校時代から知り合いだった淳子さん(84)と結婚、世田谷区上馬に住んだ。夫妻は2月初旬に鹿児島県をスタートし、花を求めて



ローヤルゼリーを採取する五十川悟朗さん

ハチとともに日本を縦断、8月半ばに北海道でゴールするまで民宿暮らしを2年間続けた。その後は主に悟朗さんだけが転

五十川養蜂園

地養蜂に従事し、淳子さんは世田谷区用賀のアパートで顧客との連絡や販売管理などを担当した。

蜂蜜やローヤルゼリーの販路は都心を中心に増え、44年には健康食品会社からローヤルゼリーの大口の注文が寄せられるなど、経営は軌道に乗った。悟朗さんは作業場を兼ねた住宅を世田谷区内で探したが、適当な物件が見つからず、市外局番が03だったこともあり、44年に駒井町に土地を購入、翌年に自宅と作業場を建てて転居した。悟朗さんはこの頃に養蜂を辞め、各地の養蜂家から蜂蜜を直接仕入れるようになったが、必ず産地に出向いて蜜の出来上がり確かめた。卸売り用の一斗缶のほか、納品先の要望で小売り用の瓶詰め商品も作るようになり、作業場が手狭になったため、48年に世田谷区喜多見の砧浄水場近くへ移転、49年に株式会社にした。

「ハチお捨てるところがなく全て使える」が悟朗さんの口癖で、現在ほど注目されていなかったローヤルゼリーやプロポリスの効用に関心を示し、採取する機械を考案して養蜂家に採取方法を教えた。悟朗さんの長男で現社長の直孝さん

(48)は、高校卒業後にカナダの大学で養蜂を学び、卒業して帰国後は転地養蜂をする生産者のもとで修行、24歳で父の会社に入って業務に従事した。悟朗さんが平成13年に急死し、淳子さんが社長に就任。27年に母から社長を引き継いだ直孝さんは父と同様、養蜂家のところへ出向き蜜の出来などを確かめて仕入れている。

淳子さんは経理などを担当していたが、14年に自宅近くの店舗で小売り販売を始めた。店では産地や花別に10数種の蜂蜜やローヤルゼリー、プロポリスなどを販売、試飲もでき、客の相談にも乗るため、好評だという。

淳子さんと直孝さんは「前社長が急死した時は、仕事を中断することもできず大変でしたが、取引先から励ましてもらいました。養蜂家や取引先との永年にわたる信頼関係がなよりの宝物です。一時、都市化で花畑が減って心配しましたが、最近は落ち着いており、これからも国産の安全な蜂蜜を提供していきたいです」と話している。

五十川養蜂園(小売り) ☎3480-8383 営業時間=午前10時~午後6時、日・月曜日休み。



五十川直孝さん(左)と淳子さん

33年に創業/花を追ってミツバチと日本縦断

YouTubeで狛江の文化芸術活動楽しむ コロナ禍のプロのアーティストを支援

新型コロナウイルス感染拡大防止対策によって活動が制限されているプロのアーティストを支援することを主な目的に、狛江市文化振興事業団が募集した狛江市文化芸術活動支援奨励金には大きな反響が寄せられた。YouTubeの狛江エコルマホールチャンネルには既にユニークで多彩な動画が2月10日頃から配信されており、今後も順次アッ

プされる予定で、多くの市民が文化芸術活動に気軽に触れる機会を提供する。事業には令和2年11月15日頃から3年1月15日までの募集期間中に、市内在住か市内を主な活動拠点にしている個人とグループ50件81人から応募があり、43件71人に奨励金の交付が決定している。配信されている動画は5~15分ほどで音楽、舞踊、



伝統芸能、演劇、朗読、映画など幅広い分野にわたり、おとなから子どもまで楽しめる。伝統芸能では子ども向けの能の声と動きの

つなげよう 音楽の架け橋
体験といったユニークなプログラムもある。狛江エコルマホールチャンネルでは今後さらに充実したプログラムを家にながら楽しめるように様々な配信を予定している。問い合わせ ☎3430-4106 狛江市文化振興事業団。